



**日本リスク学会
第37回年次大会 プログラム要旨**

Program of the SRA Japan 37th Annual Meeting

会期 : 2024年11月15日(金)~17日(日)

会場 : 静岡県立大学 草薙キャンパス

主催 : 一般社団法人 日本リスク学会

The Society for Risk Analysis, Japan

目次

表紙 プログラム.....	1
大会概要.....	1
第 37 回日本リスク学会年次大会.....	1
大会テーマ「複合、災害連鎖」	1
大会概要.....	2
1. 基本情報.....	2
2. 大会までのスケジュール.....	3
3. 参加費等.....	3
発表について.....	4
1. 発表テーマ.....	4
2. 発表の種類.....	4
3. 企画セッション.....	4
4. 研究報告セッション.....	4
5. ハイブリッド発表(ポスター発表).....	4
6. 大会優秀発表賞.....	5
大会会場について.....	6
1. 大会会場と会場へのアクセス.....	6
2. キャンパスマップ.....	7
3. 会場見取り図.....	8
4. 宿泊について.....	10
5. 会場のご利用について.....	10
大会プログラム.....	11
1. プログラム概要.....	11
2. プログラム詳細.....	13
11月16日(土) 9:10～10:40.....	13
11月16日(土) 10:50～12:20.....	14

11月16日(土) 13:20 ~ 15:00.....	15
11月16日(土) 15:10 ~ 16:40.....	18
11月16日(土) 16:45 ~ 18:00.....	19
11月17日(日) 9:10 ~ 10:40.....	19
11月17日(日) 10:50 ~ 12:20.....	21
11月17日(日) 12:20 ~ 13:20.....	23
11月17日(日) 13:20 ~ 14:50.....	23
11月17日(日) 15:00 ~ 16:30.....	25

第 37 回日本リスク学会年次大会

この度、第 37 回日本リスク学会年次大会を 2024 年 11 月 15 日(金)～17 日(日)の日程で静岡県立大学草薙キャンパスにおいて開催させていただくこととなりました。

静岡の地で日本リスク学会年次大会を開催できることを、大変嬉しく思っております。2011 年の東日本大震災後、静岡大学の浜松キャンパスで開催されて以来、13 年ぶりの静岡での開催となり、静岡市での開催は今回が初めてとなります。

今回の静岡大会のテーマは「**複合、災害連鎖**」といたしました。本県は、南海トラフ巨大地震の震源地となることが予想されており、この地震に伴う国の試算で、最悪のケースでは全国で約 32 万 3 千人が犠牲となり、国民の約 46%が被災者になるとされています。

南海トラフ発生時には、大地震による直接被害だけではなく、その後の、山・崖崩れ被害、津波による浸水被害、出火・延焼による被害などの複合的な被害が想定され、災害が連鎖していくことも考えられます。多くの中山間地域を抱え、伊豆半島を含めて横に長い静岡県は、広範囲に災害連鎖していくことが懸念されます。

2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震では、半島という地形における防災、復興対応の難しさが改めて指摘されています。本大会のシンポジウムでは、静岡県の危機管理部の担当者もお招きして、皆様と議論したいと考えております。一人でも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

●大会テーマ「複合、災害連鎖」●

近年、地球規模で自然災害の発生頻度およびその規模は増大しており、私たちは日々、その影響を身をもって感じています。

また、地震、洪水、台風などの単一の災害だけでなく、複数の災害—もしくは人災ともいべきヒューマンエラーが同時または連続して発生することで、被害が増幅される「複合、災害連鎖」のリスクが高まっています。これらの災害がもたらす被害を軽減するために、月並みではありますが、学際的なアプローチを通じて、起こりうるリスクを予測し、想定し、正しい備えを行うことがまず第一歩となります。

日本リスク学会の年次大会の場で、今、私たちが考えるべきこと、想定すべきことを共有し、最善のアプローチを模索出来れば幸いです。

第 37 回日本リスク学会年次大会 実行委員長
上野 雄史
(静岡県立大学経営情報学部)

大会概要

1. 基本情報

(1) 期間

2024年11月15日(金) 前日イベント

2024年11月16日(土)～17日(日) 年次大会

(2) 大会の構成

11月15日(金) 前日イベント

- ・場所：静岡県地震防災センター（〒420-0042 静岡県静岡市葵区駒形通5丁目9-1）
- ・予定：13時過ぎにJR静岡駅に集合し、地震防災センターへ移動（17時ごろ解散）

11月16日(金) 年次大会1日目

- ・場所：静岡県立大学草薙キャンパス看護学部棟・経営情報学部棟
- ・予定：8:30 受付開始
9:00 開会式
9:10～16:40 企画セッション、研究報告セッション、ハイブリッドセッション、全体セッション
16:45～18:00 学会賞表彰、学会賞受賞者による講演
18:20～20:00 懇親会（静岡県立美術館内 Rodin TERRACE）

11月17日(金) 年次大会2日目

- ・場所：静岡県立大学草薙キャンパス看護学部棟
- ・予定：8:30 受付開始
9:10～12:20 企画セッション、研究報告セッション
12:40～13:10 ランチミーティング
13:20～16:30 企画セッション、研究報告セッション
16:40 閉会式

(3) 大会ウェブページ

URL：<https://www.sra-japan.jp/SRAJ2024-Web/>

(4) 第37回年次大会実行委員会

- | | |
|----------|--|
| 大会実行委員長 | 上野 雄史（静岡県立大学） |
| 大会副実行委員長 | 内藤 博敬（静岡県立農林環境専門職大学） |
| 実行委員 | 曾根 秀一（静岡文化芸術大学）、小杉 素子（静岡大学）、前田 恭伸（静岡大学）、李 泰榮（国立研究開発法人 防災科学技術研究所）、小野 恭子（国立研究開発法人産業技術総合研究所）、竹田 宜人（北海道大学） |

(5) 大会実行委員会事務局および日本リスク学会事務局

・大会実行委員会事務局

〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1 静岡県立大学草薙キャンパス 上野雄史研究室

e-mail: taikai2024@sra-japan.jp

・日本リスク学会事務局

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター 一般社団法人日本リスク学会

e-mail: sra-japan@bunken.co.jp

2. 大会までのスケジュール

2024年 7月上旬	大会特設 web サイト開設、企画セッション・発表・参加登録開始参加費等
8月15日(木)	プログラム案、一般公開セミナー概要を公開
9月9日(月)	企画セッション・発表登録締め切り
10月14日(月)	予稿原稿投稿締め切り
10月28日(月)	早期参加登録・早期振込締め切り
10月31日(木)	最終プログラム案と講演題目を公開、案内チラシを公開
11月5日(火)	講演論文集を公開 (パスワード設定、参加者周知)
11月11日(月)	参加登録・参加費振込締め切り (11/13(水)登録サイトを閉鎖)
11月15日(金)	前日イベント開催
11月16日(土)~17日(日)	年次大会

3. 参加費等

(1) 大会参加費

区分	早期申込	最終申込
正会員・賛助会員・購読会員・協賛団体会員	5,000 円	6,000 円
学生会員	0	2,000 円
学生非会員	2,000 円	3,000 円
その他 (非会員)	7,000 円	8,000 円

※企画セッションの発表者で当該セッションのみ参加の方は参加費無料です。

※名誉会員の大会参加費は、次の通りです。

- ・「口頭発表 (一般)」や「ハイブリッド発表」を行う場合：正会員価格
- ・「企画セッション」で発表し、それ以外のセッションも参加する場合：正会員価格
- ・「企画セッション」で発表し、その企画セッションのみ参加する場合・発表しない場合：無料

※協賛団体の学協会員の方の参加費は本学会の会員価格で参加できます。

(2) 懇親会参加費

区分	
正会員・賛助会員・購読会員・協賛団体会員	5,000 円
学生会員	3,000 円
学生非会員	5,000 円
その他 (非会員)	8,000 円

※10月28日までの事前申し込み・振込限定、先着 50 名

※前日イベント (地震防災センター訪問) については参加費無料

発表について

1. 発表テーマ

日本リスク学会年次大会では、環境・健康リスク、災害リスク、工学リスク、経済学・保険リスク、リスク認知とコミュニケーション、リスク分析・評価の方法、リスクマネジメントとリスク政策など、「リスク」に関連した発表をすることができます。

2. 発表の種類

本年次大会では、「企画セッション」「一般発表（研究報告セッション）」「ハイブリッド発表（ハイブリッドセッション）」の他に、「全体発表」や「口頭発表（一般）」があります。

3. 企画セッション

企画セッションは、日本リスク学会の会員がオーガナイザーとして申請したセッションです。オーガナイザーが座長を務めます。企画セッションでの発表時間の長さについては、オーガナイザーが決定します。

4. 研究報告セッション

発表時間は20分、内訳「発表12分＋質疑応答8分」です。

5. ハイブリッド発表（ポスター発表）

（1）発表の様式、基本的な流れ

希望者は16日（土）13時10分より別途掲示した発表順番に従い、2分以内で口頭発表を行い、その後、ハイブリッドセッションでの発表者全員がポスターの前でそれぞれ発表を行います。

- ・ポスター会場は、当日の朝11:00に開放予定です（ポスター会場は経営情報学部棟1階4109教室です）。
- ・ポスターを張り付けるパネルは、マグネットパネルで、大きさはW900mm、H2100mmです。ポスターの大きさとしてはA0サイズ(841mm×1189mm)を推奨しますが、パネル内に収まるならどのような大きさでも結構です。
- ・ポスター貼り付けに必要な文具は実行委員会事務局がご用意します。
- ・掲示期間終了後、ポスターは速やかに回収をお願いします。11月16日の16時以降にパネルに残っているポスターは、実行委員会事務局で廃棄します。

（1）口頭発表

- ・口頭発表予定者は、発表時、「発表題目・著者・簡単な要旨」を記載したスライドを1枚だけ投射します。
- ・発表用のスライドは事前に連絡した様式で提出してください。

(2) ハイブリッドポスター発表

- ・ポスター発表は、口頭発表の後に行います。
- ・ご自身のポスターの前でご発表ください。
- ・ポスターは、ポスター会場に 16 日（土）の 13:10（ポスター発表のショートスピーチ 10 分前）までに掲示して下さい。

6. 大会優秀発表賞

2024 年 4 月 1 日時点で 40 歳未満の方が筆頭発表者（第 1 著者）として発表される場合は、大会優秀発表賞の候補となります。

大会会場について

1. 大会会場と会場へのアクセス

大会会場：静岡県立大学 草薙キャンパス

〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1

電話：054-264-5102（代表）

【静岡県立大学は2つのキャンパスからなります。今回の会場は草薙キャンパスになります。
お間違いないようにお越しください】



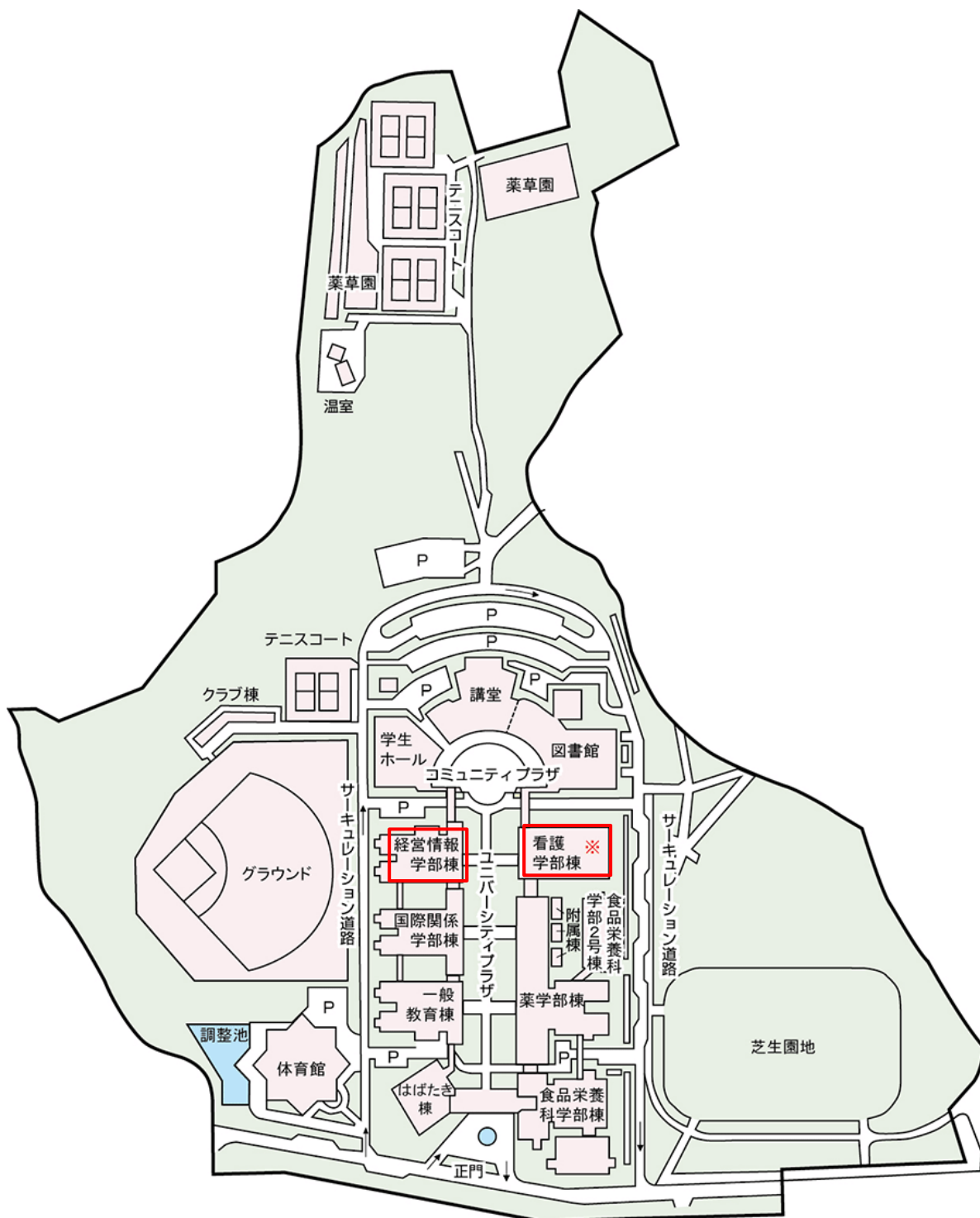
【アクセス】

電車：JR「草薙駅」南口（県大・美術館口）、または静岡鉄道「県立美術館前駅」、同「草薙駅」から徒歩15分

バス：JR「草薙駅」（県大・美術館口）バス停から草薙団地行き（三保草薙線）で「県立大学入口」下車、徒歩5分

2. キャンパスマップ

会場となる看護学部棟・経営情報学部棟の場所については、下図をご参照下さい。

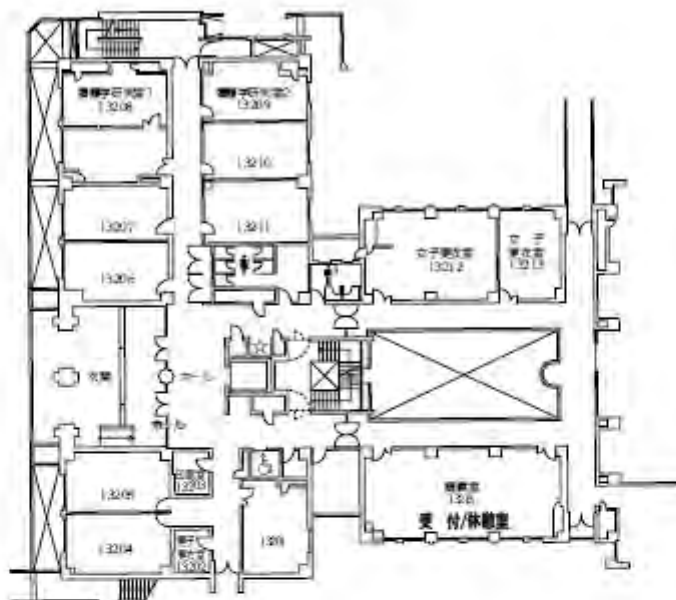


※大会2日間通して、メインの会場は看護学部棟となります。

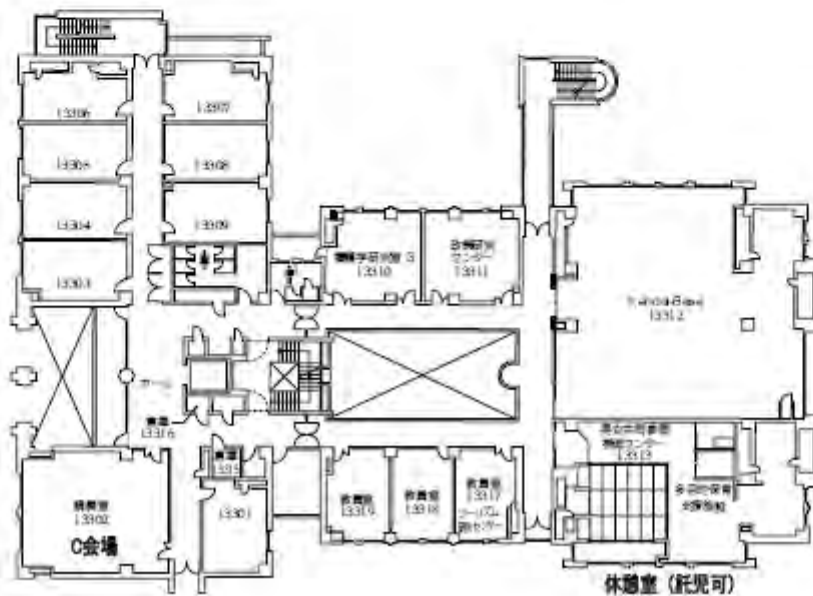
大会1日目(11/16(土))のハイブリッドセッションのみ経営情報学部棟が会場となります。

3. 会場見取り図

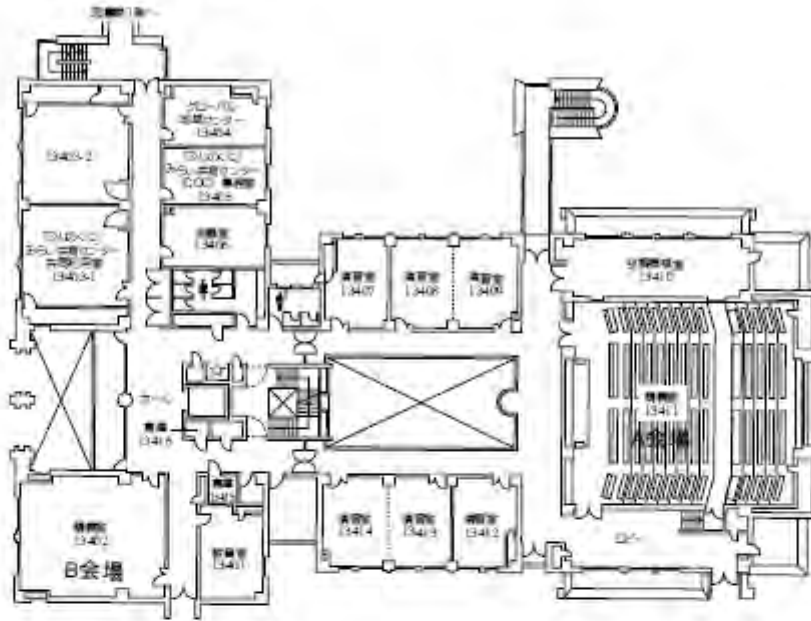
看護学部棟（2階）



看護学部棟（3階）



看護学部棟 (4 階)



経営情報学部棟 (1 階)



4. 宿泊について

宿泊先関係については都市部よりはやや余裕がありますが、早めに予約を取られることをお勧めします。場所としては静岡駅周辺がアクセスの観点からおススメですが、清水駅にもホテルはいくつかございます。大学のある草薙駅周辺にはほとんどホテルはございませんのでご注意ください（民泊の施設がいくつかあります）。

5. 会場のご利用について

(1) WiFi の利用環境について

キャンパス内は eduroam の通信スポットが限定的なため、Wifi 環境を提供します。

Wifi のアクセスパス、インターネット認証システム・ユーザ ID を学会当日受付に掲示します。設定について基本的にご自分でお願いします（特に、学会の受付業務で多忙な時にはスタッフは対応できないことが想定されます）。本学では Wifi による接続した後に、ネットワーク認証が別で求められます。当日、認証キーを掲示します。ただし、学内無線 LAN の AP1 台に機器 40 台以上が接続する場合は、速度の低下、接続の不安定化が起きることがあります。利用は限定的とお考え下さい。安定的な通信環境を確保されたい方は、Wifi ルーター等をご自分でご準備ください。

参考情報：eduroam は看護学部棟 4 階 13411 教室（A 会場）のみで利用可能です。

(2) 休憩所について

16～17 日は、児童に対応した休憩所を希望者に開放します。ご利用になられる方は、実行委員会に 11 月 11 月までにご連絡ください。当日ですと対応できないことがあり得ます。保育士を雇用しての休憩所ではなく、保護者同伴が必須となりますのでご注意ください。

(3) 昼食について

土曜日、日曜日は本学の学食は営業していませんので、各自でご準備ください。徒歩 5～10 分以内にミニストップとセブンイレブンがあります。草薙駅から徒歩で本学に行きますと、途中にみえてくるのがセブンイレブンです。また草薙駅を降りてすぐにもローソンがあります。

(4) クロークについて

受付で大型の荷物はお預かりすることが出来ます。貴重品等の管理は出来ませんので、ご自分でお持ちになってください。

大会プログラム

1. プログラム概要

■ 0日目 11月15日（金）前日イベント

静岡県地震防災センターへのエクスカージョン

13時過ぎJR静岡駅集合、14：00～17：00（予定）

（静岡県地震防災センター：〒420-0042 静岡県静岡市葵区駒形通5丁目9-1）

■ 1日目 11月16日（土）静岡県立大学草薙キャンパス看護学部棟（ハイブリットセッションのみ経営情報学部棟1階4109教室で実施）

8:30-17:00	受付：13215教室		
	A会場（13411教室）	B会場（13402教室）	C会場（13302教室）
9:00	開会式		
9:10-10:40	企画セッションA1	企画セッションB1	研究報告セッションC1
	グローバルな化学物質リスク ガバナンスの展望とベスト プラクティス		リスク論・評価： 座長 岸本充生
	藤井健吉（花王株式会社）、 東海明宏（大阪大学）		C1-1 伊藤浩志
			C1-2 今出夢乃
			C1-3 伍 潔玲
		C1-4 齋藤駿介	
休憩			
10:50-12:20 A2,B2は12:20 C2は12:30まで	企画セッションA2	企画セッションB2	研究報告セッションC2
	調査公害について考える	新型コロナワクチンのリスク・ ベネフィットの検証	環境と健康リスク評価： 座長 井上知也
	小林智之（福島県立医科大学医学 部災害こころの医学講座）、 村上道夫（大阪大学感染症総合教 育研究拠点）	掛谷英紀（筑波大学）	C2-1 秦 寛夫
			C2-2 野呂和嗣
			C2-3 星野真梨彩
C2-4 小林 諒真			
12:20-12:30	お昼休憩		
13:20-15:00	ハイブリットセッション（ポスター発表・ショートスピーチ）D1		
	経営情報学部棟 1階 4109教室 （ハイブリットセッション情報（D1）のシートに報告者とセッション番号を記載しています）		
15:10-16:40	A会場（13411教室）		
	全体セッション（一般公開） ★特別講演： 静岡県危機管理部 新被害想定対策室長 板坂孝司 「伊豆半島の自然災害と 地震・津波対策」		
16:45-18:00	学会賞の表彰		
	学会賞受賞者による講演		
18:20-20:00	懇親会（先着50名）		
	静岡県立美術館内 Rodin TERRACE		

■ 2日目 11月17日 (日) 静岡県立大学草薙キャンパス看護学部棟

8:30-17:00		受付：13215教室		
		A会場 (13411教室)	B会場 (13402教室)	C会場 (13302教室)
9:10-10:40		企画セッションA3	企画セッションB3	研究報告セッションC3
「ワークショップ」リスクコミュニケーション評価の視点と枠組みについて考える		「その〇〇、大丈夫？」～アリナシの二分法を超えて～	災害・原子力リスク (その1) : 座長 村上道夫	
9:10-9:30	土田昭司 (関西大学)、 竹田宜人 (北海道大学)	岸本充生 (大阪大学)	C3-1 相馬ゆめ	
9:30-9:50			C3-2 佐藤美佳	
9:50-10:10			C3-3 山口文恵	
10:10-10:30			C3-4 大澤英昭	
10分				
休憩				
10:50-12:20		企画セッションA4	企画セッションB4	研究報告セッションC4
除去土壌等の県外最終処分に関する社会受容性-2045年までの処分完了に向けて必要なこと-		初等中等教育課程に導入するリスク教育とは	公共政策とリスク 座長：竹田宜人	
10:50-11:10	高田モモ (産業技術総合研究所地質調査総合センター)、 村上道夫 (大阪大学感染症総合教育研究拠点)	金澤伸浩 (秋田県立大学)、 内藤博敬 (静岡県立農林環境専門職大学)	C4-1 松澤孝明	
11:10-11:30			C4-2 吉田 朗	
11:30-11:50			報告辞退	
11:50-12:10			C4-4 辻本光英	
10分				
休憩				
12:20-13:20		ランチミーティング		
編集委員会から「リスク学研究の投稿状況とJ-Stageのアクセス状況について」				
休憩				
13:20-14:50		企画セッションA5	企画セッションB5	研究報告セッションC5
「全懸念化学物質」の環境リスク評価に向けて		防災と保健の融合による地震災害リスク軽減の方略	リスク認知と意思決定支援 座長：島田洋子	
13:20-13:40	大野浩一 (国立環境研究所)、 山本裕史 (国立環境研究所)	小杉素子 (静岡大学)、 福島 洋 (東北大学)	C5-1 清水右郷	
13:40-14:00			C5-2 中山敬太	
14:00-14:20			C5-3 荒堀智彦	
14:20-14:40			報告辞退	
10分				
休憩				
15:00-16:30		企画セッションA6	企画セッションB6	研究報告セッションC6
リスク学の視点からPFAS規制のありかたを話し合う その2		企業、組織のサステナビリティ・マネジメントとリスク	災害・原子力リスク (その2) 座長：桑垣玲子	
15:00-15:20	永井孝志 (農研機構)、平井祐介 (工業所有権情報・研修館)	曾根秀一 (静岡文化芸術大学)、 前田祐治 (関西学院大学)	C6-1 岡崎 亘	
15:20-15:40			C6-2 李 泰榮	
15:40-16:00			C6-3 柴田侑秀	
16:00-16:20			C6-4 水田和生	
10分				
休憩				
16:40-16:50		閉会式		

* 2024年4月1日時点で40歳未満の方が筆頭発表者 (第1著者) として発表される場合は、大会優秀発表賞の候補となります。

2. プログラム詳細

11月16日(土) 9:10～10:40

A会場 (13411 教室)

企画セッション A1 グローバルな化学物質リスクガバナンスの展望とベストプラクティス
座長 藤井健吉 (花王株式会社), 東海明宏 (大阪大学)

このセッションでは、化学物質管理と循環型経済のレギュラトリーサイエンスをテーマにパネルディスカッションを企画する。コロナ禍に並行して、世界各国で化学物質管理体系にサーキュラーエコノミーやサステナビリティの枠組みが上乘せされ、欧州規制や国際条約などの規制制度の再考が模索されています。話題提供として、Global Framework on Chemicals (GFC)やプラスチック条約、欧州グリーンディール政策や持続可能性のための化学物質戦略 CSS、などの直近事例を分析的にとりあげつつ、パネルディスカッションでは、グローバルな化学物質リスクガバナンスの展望を、リスク学的アプローチで語り合いたいと思います。

A1-1 化学物質管理のグローバルトピックス：GFC、UN プラスチック条約など

○井上知也 (みずほリサーチ&テクノロジーズ)

A1-2 欧州グリーンディール政策のレギュラトリーサイエンス

○岩下真純 (花王)

パネルディスカッション

「化学物質管理とサーキュラーエコノミーシステム、持続可能性に関する制度の可能性」

パネリスト：国内有識者数名

C会場 (13302 教室)

研究報告セッション C1 リスク論・評価
座長 岸本充生 (大阪大学)

C1-1 リスク論の限界と可能性

—福島原発事故を例に＝なぜ健康の社会的決定要因は見逃されてしまうのか＝

○伊藤浩志 (独立研究者)

C1-2 作業環境のリスク評価を指向した揮発性有機化合物用大気サンプラーのサンプリングレートの算出

○今出夢乃 (静岡県立大学), 野呂和嗣 (静岡県立大学), 雨谷敬史 (静岡県立大学)

C1-3 GIS を用いた高地ため池の水文特性評価：入笠湖を対象としたリスク分析

○伍潔玲 (公立諏訪東京理科大学)

C1-4 Vulnerable Consumer への配慮の合理化に向けた定量的リスク比較手法の検討

○齋藤駿介 (製品評価技術基盤機構), 川村大伸 (名古屋工業大学)

11月16日(土) 10:50~12:20

A会場 (13411 教室)

企画セッション A2 調査公害について考える

**座長 小林智之 (福島県立医科大学医学部災害こころの医学講座) ,
村上道夫 (大阪大学感染症総合教育研究拠点)**

このセッションでは、災害などの大きな出来事があった際に度々問題となる調査公害について議論していきます。調査公害について明確な定義は存在していませんが、社会調査の増加や、調査の項目の過多および複雑化により、調査対象者に肉体的または精神的負担がかかる現象を指します。大きな災害や感染症の拡大などが生じた際には、専門機関や研究者の間で関心が高まり、いくつもの社会調査が一斉に行われることがあります。1つ1つの調査は被災者などの現状を明らかにしたいという動機で実施されるのですが、調査実施における配慮のなさが調査の受け取り側に負担や迷惑を招く状況を生んでいます。実際、東日本大震災においては、被災地における調査疲れや回答拒否が大きな問題となりました。しかし、調査を行う側である専門機関や研究者の間で、これまで調査公害の問題が十分に議論されることはあまりなく、その定義も含め、どのような対応や配慮が求められるのかが整理されてきませんでした。そこで、この企画セッションの中では、東日本大震災をはじめとする大きな出来事で実際に調査に関わってきた研究者を招き、調査公害の実情や予防策の提案について言及していきます。

A2-1 調査公害に関する学術体系の構築に向けて

○村上道夫 (大阪大学感染症総合教育研究拠点)

A2-2 災害と調査公害：現地でのリサーチマナー

○小林智之 (福島県立医科大学)

A2-3 医療従事者と災害調査公害：東日本大震災後の福島県沿岸部の経験から

○尾崎章彦 (福島県立医科大学)

A2-4 ありがた迷惑な善意：なぜ研究者は当事者の立場から調査できないのか

○大沼進 (北海道大学)

コメンテータ：標葉隆馬 (大阪大学)

B会場 (13402 教室)

企画セッション B2 新型コロナワクチンのリスク・ベネフィットの検証

座長 掛谷英紀 (筑波大学)

日本は新型コロナワクチンが一人当たり世界で最も多く接種された国の一つである。しかしながら、オミクロン株の登場以降、日本の感染率は世界で最も高いレベルとなり、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) による死者数は累計10万人を超えている。ワクチン接種がなければ、もっと多くの死者が出たとの研究報告もあるが、その元となる数理モデルは信頼性に欠く部分があり、詳細な検証を要する。さらに、新型コロナワクチンの副反応による被害も深刻で、2024年8月5日時点の予防接種健康被害救済制度の認定者数は7835名 (うち死亡747名) にのぼっている。これは過去のワクチンに比べて遥かに甚大であるが、そうした被害の実態が十分に検証されているとはいえない。さらに、被害者が十分な救済を受けられていない面もある。一部の被害者は国が十分に広報しないまま接種を勧めたことで被害を受けたとして、損害賠償を求

めて裁判で国を訴えるに至っており、リスクコミュニケーションの問題も顕在化している。本セッションでは、新型コロナワクチンの効果と被害の実態を踏まえて、そのリスク・ベネフィットを議論する。

B2-1 新型コロナワクチンの効果を示した数理疫学研究の批判的レビュー

○掛谷英紀（筑波大学）

B2-2 新型コロナワクチン接種後の月経異常リスク：世界における論文報告の現状

○本橋秀之（東京医科大学）

B2-3 予防接種健康被害救済制度に関する考察

○安岡匡也（関西学院大学）

C 会場（13302 教室）

研究報告セッション C2 環境と健康リスク評価

座長 井上知也（みずほリサーチ&テクノロジーズ）

C2-1 電気自動車の導入による人工排熱量の変化と大気中の O₃ と PM_{2.5} 濃度への影響、そのヒト健康リスク評価

○秦寛夫（産業技術総合研究所）、水嶋教文（産業技術総合研究所）、井原智彦（東京大学）

C2-2 シロアリ防除剤の室内濃度とヒトへの初期リスク評価

○野呂和嗣（静岡県立大学）、山口夏純（いであ株式会社）、王斉（労働安全衛生総合研究所）、雨谷敬史（静岡県立大学）

C2-3 加熱式タバコから放散される香料物質のリスク評価

○星野 真梨彩、野呂 和嗣、雨谷 敬史（静岡県立大学）

C2-4 輸出製品に含まれる化学物質に由来するヒト健康リスクの評価とリスク削減対策の評価

○小林諒真（大阪大学大学院工学研究科）、東海明宏（大阪大学大学院工学研究科）、中久保豊彦（大阪大学大学院工学研究科）

C2-5 ブレーキ摩耗に由来する非排出ガスによる健康リスクの評価

○岡崎祐樹（大阪大学）、東海明宏（大阪大学）、中久保豊彦（大阪大学）、伊藤理彩（北九州市立大学）

11 月 16 日（土） 13 : 20 ~ 15 : 00

経営情報学部棟 1 階 4109 教室

ハイブリッドセッション D1 ショートスピーチ、ポスター発表

司会進行 内藤博敬（静岡県立農林環境専門職大学）

D1-1 放射線被ばくに伴うがん罹患・死亡リスク評価コードの開発—汎用性を高めるためのリスク表示—

○廣内淳（JAEA）、鯨岡郁雄（JAEA）、野口芳宏（ペスコ）、真辺健太郎（JAEA）、高原省五（JAEA）

D1-2 医療機器等の抽出物及び浸出物（E&L）評価手法の整理

○片桐律子（一般財団法人化学物質評価研究機構）、田辺愛子（一般財団法人化学物質評価研究機構）、福島麻子（一般財団法人化学物質評価研究機構）、林多恵（一般財団法人化学物質評価研究機構）、小滝徹（一般財団法人化学物質評価研究機構）、広瀬明彦（一般財団法人化学物質評価研究機構）

D1-3 動画配信サイトのコメント欄テキストを活用した自殺リスク緩和表現抽出の試み

○竹林由武（福島県立医科大学）

D1-4 室内環境におけるイソシアネートの曝露経路の決定とそのリスク評価

○柿本祐奈（静岡県立大学）、王齊（労働安全衛生総合研究所）、野呂和嗣（静岡県立大学）、三宅祐一（横浜国立大学）、雨谷敬史（静岡県立大学）

D1-5 AI（人工知能）についての市民リスク認知に関する探索的研究

○永井ゆりか（神戸大学）、村山留美子（神戸大学）、藤長愛一郎（大阪産業大学）、内山巖雄（ルイ・パストゥール医学研究センター）

D1-6 我が国のリスクコミュニケーションに関する事例調査

○吉田宏亮（静岡社会健康医学大学院大学）、山口さち子（静岡社会健康医学大学院大学、情報通信研究機構）、奈良由美子（放送大学）、小島原典子（静岡社会健康医学大学院大学）

D1-7 災害・事故時の環境リスク管理に資する情報基盤システム D.Chem-Core の改善

○今泉圭隆（国立環境研究所）、小山陽介（国立環境研究所）、鈴木規之（国立環境研究所）、中島大介（国立環境研究所）、高澤嘉一（国立環境研究所）

D1-8 室内空気およびハウスダスト中の多環芳香族炭化水素類およびそのハロゲン化誘導体のリスク評価

○滝川 哲也（静岡県立大学）、王 齊（労働安全衛生総合研究所）、高橋ゆかり（富山国際大学）、野呂和嗣（静岡県立大学）、三宅 祐一（横浜国立大学）、雨谷 敬史（静岡県立大学）

D1-9 水環境に油膜が張った条件における 118 種農薬の分析方法の開発と評価

○永長愛華（静岡県立大学）、野呂和嗣（静岡県立大学）、雨谷敬史（静岡県立大学）

D1-10 原発再稼働地域住民の防災態勢への認識と生活満足度・居住意思との関連を福島原発事故の教訓から検討する調査

○大須賀健一（昭和女子大学）、竹林由武（福島県立医科大学）、田巻倫明（福島県立医科大学）

D1-11 COVID-19 流行で市民のリスク認知は変わったか？

○村山留美子（神戸大学）、藤長愛一郎（大阪産業大学）、岸川洋紀（武庫川女子大学）、土田昭司（関西大学）、内山巖雄（ルイ・パストゥール医学研究センター）

D1-12 リスクコミュニケーションを対象としたシステマティックレビュー論文におけるオーバービュー

○山口さち子（国立研究開発法人情報通信研究機構、静岡社会健康医学大学院大学）、森寛子（静岡社会健康医学大学院大学）、奈良由美子（放送大学）、大西輝夫（国立研究開発法人情報通信研究機構）、小島原典子（静岡社会健康医学大学院大学）

D1-13 仮想的な原子力災害に起因する除去土壌等の最終処分の社会受容性の国際比較： オンラインアンケートの自由記述のテキスト解析による受容・非受容の要因評価

○武田理熙（北海道大学）・高田モモ（産業技術総合研究所）・藤井新子（産業技術総合研究所）・村上道夫（大阪大学 CiDER）・大沼進（北海道大学）・白井浩介（産業技術総合研究

所)・柴田侑秀(北海道大学)・Thierry Schneider(CEPN)・保高徹生(産業技術総合研究所・北海道大学)

- D1-14 大阪大学における全学 DX 推進施策のリスクアセスメント：顔認証入場システムのケース
○岸本 充生(大阪大学)、田中 孝宣(大阪大学)、水町 衣里(大阪大学)、鈴木 径一郎(大阪大学)、長門 裕介(大阪大学)、カテライ アメリア(大阪大学)、鹿野 祐介(大阪大学)、井出和希(大阪大学)
- D1-15 化学物質事故対応を想定した演習における参加者の認知・認識変化とアンケートによるその定量的評価
○小山陽介、今泉圭隆、中島大介、高澤嘉一、鈴木規之(国立環境研究所)
- D1-16 事業者が策定する BCP におけるリスク評価の状況について (2)
○竹田宜人(北海道大学)
- D1-17 水害リスクの我が事化に向けたリスク評価・提示手法に関する研究～住宅の浸水を例として～
○植村郁彦、田口真矢、舛屋繁和、大村宣明、吉田隆年(株式会社ドーコン)、千葉学(北海道河川財団)、秩父宏太郎(国土交通省 北海道開発局 建設部 河川計画課)
- D1-18 極性有機化合物積算サンプラーを用いた河川中農薬の生態リスク評価
○守谷美祐(静岡県立大学)、野呂和嗣(静岡県立大学)、矢吹芳教(大阪環農水研)、雨谷敬史(静岡県立大学)
- D1-19 室内化学物質暴露に関わる子供の消費者製品事故のリスク評価
○青木幸生(大阪大学)、青木菜々子(佐賀大学)、中久保豊彦(大阪大学)、東海明宏(大阪大学)
- D1-20 リスクのものさし表示ツール「RiskTools」の開発
○永井孝志(農研機構)
- D1-21 ナノ・マイクロプラスチック汚染と PFAS 汚染をめぐる共通する構造的課題に関する検討—日本の対応策からみえる制度上の課題—
○中山敬太(公益財団法人日本都市センター)
- D1-22 リスクの不確実性(uncertainty)と多義性(ambiguity)に対する市民の捉え方に関する整理
○浦山郁(関西大学大学院)、土田昭司(関西大学)
- D1-23 食品安全委員会が地方自治体と行う食品の情報発信・リスクコミュニケーションに関する検討調査の報告
○松永陽子(日本エヌ・ユー・エス株式会社)、藤田佳代(元食品安全委員会事務局)
- D1-24 学校給食の安全・安心に関わるリスクコミュニケーションの効果検証
○山崎毅、大瀧直子、牧美弥子((特非)食の安全と安心を科学する会)、山口治子(愛知大学)
- D1-25 再生プラスチックの健康リスク評価：RoHS 指令対象物質に着目したケーススタディ
○小島直也(産業技術総合研究所)、篠原直秀(産業技術総合研究所)、小栗朋子(産業技術総合研究所)、小倉勇(産業技術総合研究所)、小野恭子、梶原秀夫(産業技術総合研究所)、中村圭介(産業技術総合研究所)、山崎絵理子(産業技術総合研究所)、羽成修康(産業技術総合研究所)、蒲生昌志(産業技術総合研究所)

- D1-26 東日本大震災・原子力災害に関する当事者意識と価値観－福島県内在住者を対象とした Web 調査データの分析－
○静間健人（東日本大震災・原子力災害伝承館）、山田修司（東日本大震災・原子力災害伝承館）
- D1-27 「SNS 社会で科学者にできること」ホームページの作成とその効果の検証
○宇野賀津子（ルイ・パストゥール医学研究センター）、鳥居寛之（東京大学）
- D1-28 駿河湾において 2023 年度に採集された海洋プラスチック中のリン系難燃剤による汚染調査手法
○三国向日葵（静岡県立大学）、滝川哲也（静岡県立大学）、野呂和嗣（静岡県立大学）、雨谷敬史（静岡県立大学）
- D1-29 愛知川中流域における河畔林が洪水リスクを利得に変えるメカニズム
○水野敏明（琵琶湖環境科学研究センター）、島本多敬（琵琶湖博物館）、小倉拓郎（兵庫教育大学）、山内啓之（立命館大学）、八反地剛（筑波大学）、濱口貴仁（琵琶湖博物館／滋賀県土木交通部流域政策局）、片山大輔（元琵琶湖博物館）

11 月 16 日(土) 15:10～16:40

A 会場 (13411 教室)

全体セッション (一般公開)

特別講演 伊豆半島の自然災害と地震・津波対策

講師 板坂孝司 (静岡県危機管理部新被害想定対策室長)

司会 前田 恭伸 (静岡大学)

伊豆半島は、火山が本州に衝突して半島となったものという特異な形成史を有する半島であり、西側の南海トラフ、東側の相模トラフで発生するプレート境界型地震・津波の影響を受けてきた。また、プレート衝突に関連する活断層が存在し、活断層型の地震もたびたび発生している。他にも活火山である伊豆東部火山群の噴火災害や風水害・土砂災害など、様々な自然災害のリスクを有し、静岡県は市町等と連携し地震・津波、火山、風水害等への対策を推進している。

令和 6 年 1 月 1 日に発生した令和 6 年能登半島地震では、能登半島の北端周辺を震源としたマグニチュード 7.6 の地震により、甚大な被害を受け、この 9 月の水害と併せて複合災害の様相を見せている。この地震においては、交通網の被害による孤立集落の発生やライフラインの復旧遅延など、半島独特の地理的、社会的な要因により、災害対応や復旧の困難性などが注目されている。

静岡県においては、令和 6 年能登半島地震の能登半島地震の被害、災害対応から得られた教訓に基づく、伊豆半島における地震・津波対策の見直し・強化が課題となっている。そこで、伊豆半島の地理的・社会的概要と、本県がこれまで進めてきた地震・津波対策を紹介した上で、令和 6 年能登半島地震における被害や防災対応の状況と、静岡県第 4 次地震被害想定（平成 25 年）における伊豆半島で想定される地震被害などを比較して、伊豆半島における地震のリスクと対応について分析する。

11月16日(土) 16:45~18:00

A会場 (13411 教室)
学会賞表彰・受賞者による講演

学会賞・グッドプラクティス賞、奨励賞の受賞講演を予定しています。

11月17日(日) 9:10~10:40

A会場 (13411 教室)
企画セッションA3 「ワークショップ」リスクコミュニケーション評価の視点と枠組みについて考える
座長 土田昭司 (関西大学)、竹田宜人 (北海道大学)

日本リスク学会リスクコミュニケーション事例研究タスクグループは、環境省の放射線の健康影響に係る研究調査事業に参画し、「効果的なリスクコミュニケーションの実践に向けた評価手法の開発の現状」とのテーマで令和5年から研究活動を行っている。本研究は、日本リスク学会が科学技術振興機構との協働で2016年に策定した「リスクコミュニケーションの評価軸」をそのスタートにしており、具体的に表現が可能な「構成要素」にリスクコミュニケーションを分解して評価できるとする検討仮説をベースにしたものである。令和5年度は放射線影響に係る事例を中心に、原子力、化学物質管理、自然災害等のリスクコミュニケーションの事例を収集し、「構成要素」のブラッシュアップを図ってきたところである。本セッションでは、「構成要素」を活用した評価の視点及び分析枠組みについて説明し、参加者から意見をいただき、今後の研究に資することを目的とする。

本企画セッションはワークショップ形式で以下の要領で行っていく。

(1) 「効果的なリスクコミュニケーションの実践に向けた評価手法の開発の現状」の概要および本セッションの趣旨説明

○土田昭司 (関西大学)

(2) 構成要素から評価の視点へ、視点を活用した評価の枠組みの説明

○竹田宜人 (北海道大学)

(3) 評価の枠組みへの意見出し:

テーブルワーク (ファシリテーター: 桑垣玲子 (電中研), 堀越秀彦 (ペスコ), 静間健人 (東日本大震災伝承館),

浦山 郁 (関西大学), 藤井中 (竹中工務店)

(4) 全体: 意見の振り返り

B会場 (13402 教室)
企画セッションB3 「その〇〇、大丈夫?」～アリナシの二分法を超えて～
座長 岸本充生 (大阪大学)

リスク学会であまり取り上げられないトピックをあえて並べて、ゼロかイチ、アリかナシ、アウトかセーフのように二分法的に扱われることが多い中で、その間のグラデーション部分を扱う工夫についてそれぞれ紹介してもらおう。これらは、「リスク」という言葉を明示的に使うかどうかは別として、広い意味でのリスクベーストアプローチの実践といえる。セッションの後半は、参加者と一緒に、4人の発表の共通項を探ったり、同様のアプローチをいろんな分野に適用できる可能性を考えたりしていきたい。

B3-1 その学術誌、大丈夫？

○井出和希（大阪大学）

B3-2 その生体データ利活用、大丈夫？

○田中孝宣（大阪大学）

B3-3 その利益相反、大丈夫？

○清水右郷（日本学術振興会特別研究員 PD・京都大学）

B3-4 そのプラスチック対策、大丈夫？

○安藤悠太（京都大学）

C 会場（13302 教室）

研究報告セッション C3 災害・原子力リスク

座長 村上道夫（大阪大学感染症総合教育研究拠点）

C3-1 除去土壌問題を巡る公共的討議における意見変化—議論フレームに着目した集団討議実験による検討

○相馬ゆめ（北海道大学），植穂奈美（北海道大学），柴田侑秀（北海道大学），辻本光英（北海道大学），崔青林（北海道大学），中澤高師（東洋大学），辰巳智行（豊橋創造大学短期大学部），有馬淑子（京都先端科学大学），大沼進（北海道大学）

C3-2 福島県在住の防災士を対象とした原子力防災/放射線防災研修の取り組み

○佐藤美佳（福島県立医科大学），邑本俊亮（東北大学災害科学国際研究所），保田真理（東北大学災害科学国際研究所），齋藤玲（東北大学災害科学国際研究所），中野篤（日本防災士機構）

C3-3 原子力災害時の防災行動意図の規定因

○山口文恵（日本原子力研究開発機構），高原省五（日本原子力研究開発機構），関谷直也（東京大学）

C3-4 高レベル放射性廃棄物地層処分施設のサイト選定方式による立地受容への影響要因の違い

○大澤英昭（日本原子力研究開発機構東濃地科学センター），大沼進（北海道大学大学院文学研究院）

A会場(13411教室)

企画セッションA4 除去土壌等の県外最終処分に関する社会受容性

-2045年までの処分完了に向けて必要なこと-

座長 高田モモ(産業技術総合研究所地質調査総合センター),

村上道夫(大阪大学感染症総合教育研究拠点)

2011年に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故後の環境除染により、福島県内で発生した約1330万m³の除去土壌等の大部分は、現在福島第一原子力発電所周辺の間貯蔵施設に保管されている。これらは、2045年までに福島県外で最終処分される予定であり、汚染の程度が低い除去土壌については、公共事業等で再生利用することで最終処分量の削減が目指されている。除去土壌等の処分・管理においては、これまで環境省を中心に技術開発が進められるとともに、再生利用や最終処分に対する国民的な理解を醸成する取り組みが行われてきた。最終処分の完了まで残り約20年となった現在、環境省は2024年度末までに最終処分の実施に向けた、ある程度具体的な工程を示す予定である。今後、最終処分の候補地選定という、より具体的な段階に入るためには、これまでとは異なるアプローチや新たな知見が求められるであろう。そこで、昨年度に引き続き、除去土壌等の県外最終処分に関する社会受容性の企画セッションを開催する。本セッションでは、主に環境総合推進費SII-9-3において包括的に進められてきた、社会受容性に関わる複数の手法を用いた研究によって得られた新たな知見を整理する。さらに、これらの成果を実社会に適用する段階で直面するであろう残された研究課題について議論する。全国民的理解醸成から具体的な候補地の選定ステップへの移行をいかにスムーズに行うかという視点での議論は少なく、この点において実社会適用を意識した科学的な課題を検討することは重要な情報となるであろう。

問題の背景説明

A4-1 除去土壌等の最終処分受け入れにおける手続き的公正及び分配的公正への選好の特性：全国郵送法調査

○村上道夫(大阪大学感染症総合教育研究拠点)、高田モモ(産業技術総合研究所地質調査総合センター)、柴田侑秀(北海道大学大学院文学研究院)、白井浩介(産業技術総合研究所地質調査総合センター)、大沼進(北海道大学大学院文学研究院)、保高徹生(産業技術総合研究所地質調査総合センター)

A4-2 県外最終処分政策へに対する国民の認識：オンラインアンケートとインタビュー調査で見えてきたこと

○高田モモ(産業技術総合研究所地質調査総合センター)、村上道夫(大阪大学感染症総合教育研究拠点)、大沼進、柴田侑秀(北海道大学大学院文学研究院)、保高徹生(産業技術総合研究所地質調査総合センター)

A4-3 除去土壌問題をめぐる多元的公正をふまえた対話の場のプロセスデザインに向けた課題

○大沼進、柴田侑秀、相馬ゆめ、辻本光英(北海道大学)、保高徹生(産業技術総合研究所地質調査総合センター)

A4-4 県外最終処分の必要性の認知と行政への信頼が処分場の受容意識に与える影響の一考察

○鈴木 薫（産業技術総合研究所地質調査総合センター）、保高徹生（産業技術総合研究所地質調査総合センター）、高田モモ（産業技術総合研究所地質調査総合センター）、鬼塚健一郎（京都大学大学院農学研究科）

A4-5 これまでに分かったこと、これから必要なこと

○保高徹生（産業技術総合研究所地質調査総合センター）

コメンテータ 万福 裕造（農業・食品産業技術総合研究機構）

B 会場（13402 教室）

企画セッションB4 初等中等教育課程に導入するリスク教育とは

座長 金澤伸浩（秋田県立大学）、内藤博敬（静岡県立農林環境専門職大学）

このセッションでは、リスクを大きさとして捉えるリスクの概念の教育を初等中等教育に導入することを見据えて、その内容や手法を議論したいと思います。日本学術会議の報告「初等中等教育におけるリスク教育の推進」では、初等中等教育課程で学習するリスクの概念やリスク教育の方法論を含むリスク教育プログラムの作成と導入を求めています。そこで、初等中等教育課程での学習に必要なリスクの概念とは何か、どのような方法で教育を行うかについて考えたいと思います。セッションでは、初等中等教育で教育が必要なリスクの概念やリスク教育プログラムの事例と応用、教育効果の評価法についての検討状況について、リスク教育タスクグループのメンバーから情報を共有したのち、今後のリスク教育プログラム開発の方向性を議論したいと思います。

B4-1 初等中等教育課程で学ぶリスク教育の方向性

○金澤伸浩（秋田県立大学）

B4-2 初等中等教育向け実践プログラム例 ～リスク教育アクティビティ集より～

○内藤博敬（静岡県立農林環境専門職大学）

B4-3 リスク教育介入とその成果の評価および活用をめぐる

○四塚朋子（追手門学院大学）

総合討論

C 会場（13302 教室）

研究報告セッションC4 公共政策とリスク

座長 竹田宜人（北海道大学）

C4-1 研究不正のリスク管理：文部科学省公開データからの示唆

○松澤孝明（東京工業大学大学院環境・社会理工学院）

C4-2 農業保険法における任意加入制に関して立法過程でなされた議論-国会議事録に着目して-

○吉田朗（早稲田大学）

C4-4 除去土壌ゲームを用いた除去土壌福島県外最終処分に向けた合意形成過程の研究

○辻本光英,鈴木祐人,大沼進（北海道大学）

11月17日(日) 12:20~13:20

A会場 (13411教室)

ランチミーティング

編集委員会から「リスク学研究所の投稿状況とJ-Stageのアクセス状況について」

座長 村上道夫 (大阪大学感染症総合教育研究拠点)

11月17日(日) 13:20~14:50

A会場 (13411教室)

企画セッションA5 「全懸念化学物質」の環境リスク評価に向けて

座長 大野浩一 (国立環境研究所)、山本裕史 (国立環境研究所)

国立環境研究所において現在実施している「包括環境リスク研究プログラム」においては、人間活動に起因する化学物質の大部分を評価・管理するため、対象物質を製造・使用されている全懸念化学物質に広げることを目指すとともに、脆弱な集団や生活史の考慮、包括的計測・数理モデル群の高度化等により、これまで定量化が困難であった影響・リスクの評価を目指している。本企画セッションにおいては、健康有害性評価、生態系有害性評価、多重・複合曝露の把握を目指した包括的計測手法、全懸念化学物質の環境動態の把握を目指した数理モデル手法、包括リスク指標の提案に向けた研究を紹介する。これらに基づき「全懸念化学物質」を対象とした包括的環境リスク評価に向けた研究が目指すべき方向性について議論を行う。

A5-1 全懸念化学物質の環境リスク評価を目指した『包括環境リスク研究プログラム』の全体像 (趣旨説明)

○山本裕史 (国立環境研究所)

A5-2 包括健康リスクと包括生態リスクの指標と評価に関する研究 (包括リスク指標プロジェクト)

○大野浩一 (国立環境研究所)

A5-3 実環境及び脆弱性を考慮した健康影響の有害性評価に関する研究 (健康有害性プロジェクト)

○小池英子 (国立環境研究所)

A5-4 脆弱性を考慮した生態系影響の有害性評価と要因解析に関する研究 (生態有害性プロジェクト)

○山本裕史 (国立環境研究所)

A5-5 全懸念化学物質の多重・複合曝露の把握を目指した包括的計測手法の開発に関する研究 (曝露計測プロジェクト)

○中島大介 (国立環境研究所)

A5-6 世界の化成品の水域排出に伴う生態リスクの包括的指標の検討 (環境動態プロジェクト)

○小山陽介 (国立環境研究所)

全体討論

B 会場 (13402 教室)

企画セッション B5 防災と保健の融合による地震災害リスク軽減の方略

座長 小杉素子 (静岡大学), 福島 洋 (東北大学)

我が国では、大きな災害に見舞われるたびに多様な防災・減災の取り組みが強化されてきているが、十分な効果が出ているとは言いがたい。災害リスクに関するリスクコミュニケーションは防災教育が中心であり、備蓄や避難訓練への参加などの行動実践についてはあまり直接的な介入を行わない。他方、保健分野では個人や集団に健康や疾病予防のための行動変容を働きかけるための介入方法が「ヘルスコミュニケーション」として長年研究され、禁煙や減塩などの問題に対して実績を挙げてきた。防災分野においても、保健分野と同様に、直接的な介入を行うことで災害リスクを大幅に軽減できることが見込まれる。そのためには、従来のリスクコミュニケーション研究とヘルスコミュニケーション研究の知見を統合し、「個人や地域の防災力を高め、災害リスクを低減するためのコミュニケーションおよび介入」を研究する“防災コミュニケーション学”を創成し実践していく必要がある。本セッションでは、地震防災にフォーカスし、防災コミュニケーションによる災害リスク軽減の方略について議論する。

B5-1 リスクコミュニケーションと防災

○小杉素子 (静岡大学)

B5-2 ヘルスコミュニケーションと防災

○尾島俊之 (浜松医科大学)

B5-3 防災コミュニケーション学の創成

○福島 洋 (東北大学)

パネリスト：立木茂雄 (同志社大学), 岩本 萌 (東北大学), 若林克茂 (静岡県)

C 会場 (13302 教室)

研究報告セッション C5 リスク認知と意思決定支援

座長 島田洋子 (京都大学)

C5-1 予防のパラドックスの有意義な扱い方

○清水右郷 (日本学術振興会特別研究員 PD・京都大学)

C5-2 生命・健康被害に対する科学的不確実性を伴うリスクに対する行政不作為の因果構造

—「VUCA」をカテゴリー化したアプローチによる検討—

○中山敬太(公益財団法人日本都市センター)

C5-3 有機フッ素化合物 (PFAS) におけるリスク情報の発信

—ハザードマップによる空間的思考と意思決定支援に向けた議論—

○荒堀智彦 (日本大学)

11月17日(日) 15:00~16:30

A会場 (13411 教室)

企画セッション A6 リスク学の視点から PFAS 規制のありかたを話し合う その2

座長 永井孝志 (農研機構)、平井祐介 (工業所有権情報・研修館)

2023年の第36回日本リスク学会年次大会企画セッションにて有機フッ素化合物(PFAS)の規制のありかた等について議論を行った。その後も食品安全委員会の評価書が公開されたり、国際がん研究機関(IARC)が発がん性評価の結果としてPFOAをグループ1、PFOSをグループ2Bに分類するなど、国内外でさまざまな動きが見られている。同時に表層水、地下水、飲料水などから検出された事例が多数報道されている。このような中、引き続きPFASのリスク評価・リスク管理について議論する場を設けることを目的とする。本企画セッションでは、国(食品安全委員会や水道水質基準における検討)や国際機関(IARCにおける発がん性評価)の取り組みに加えて、産学官の連携(PFAS対策技術コンソーシアムの取組み)や自治体の取組み(モニタリング等)も併せて報告頂く予定である。さまざまな主体の取り組みを共有することで多角的な議論が期待される。

A6-1 食品安全や水道水質基準における PFAS への対応の検討について

○浅見真理(国立保健医療科学院)

A6-2 PFOS・PFOAの発がん性評価・分類とPFAS管理への投影

○菅野純(国立医薬品食品衛生研究所)

A6-3 PFAS対策技術コンソーシアムの取組みについて

○羽成修康(産業技術総合研究所)

A6-4 有機フッ素化合物に関する東京都の取組

○東川直史(東京都環境局)

パネルディスカッション

B会場 (13402 教室)

企画セッション B6 企業、組織のサステナビリティ・マネジメントとリスク

座長 曾根秀一(静岡文化芸術大学)、前田祐治(関西学院大学)

本セッションでは、経営経済を中心とした幅広い視点を通じて、企業や組織等におけるサステナビリティマネジメントやリスクマネジメントに着目したものである。このサステナビリティなマネジメントを意識する背景には、近年、企業や組織において存続、維持の難しさがあげられよう。また、様々な存続リスクが生じるが、こうした諸問題をどのように解決してきたのか、あるいは解決しようとしているのか、具体的な事例等をあげ、論じていきます。企画セッションの中では、企業史、経営戦略論、ファイナンス、会計学などの研究者を通じて、近年、ますます着目されるこれらの重要な課題について議論していきます。

B6-1 企業のサステナビリティ・リスクと情報開示

○上野雄史(静岡県立大学)

B6-2 長期存続企業内における家訓、社訓を通じたサステナビリティ・マネジメント：エフェクチュエーションの理論を中心に

○ 曾根秀一（静岡文化芸術大学）

B6-3 サステナブル・リスクマネジメント

○ 前田祐治（関西学院大学）

C 会場（13302 教室）

研究報告セッション C6 災害・原子力リスク

座長 桑垣玲子（電中研）

C6-1 原子力・放射線を含む様々なリスク源に関するリスク認識についての調査

○岡崎亘（エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ（株））、田居志津子（エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ（株））、來幸佑（エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ（株））、池田陽平（エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ（株））、桑原滉（内閣府）、山本知史（内閣府）、梅北栄一（内閣府）

C6-2 被災地の避難所運営における災害リスクガバナンスの実態

○李泰榮、池田真幸、大塚理加（防災科学技術研究所）、永松伸吾（関西大学）

C6-3 除去土壌県外最終処分を題材とした市民参加ワークショップ—議論内容の分類と地域差の検討

○柴田侑秀（北海道大学）、崔青林（北海道大学）、相馬ゆめ（北海道大学）、辻本光英（北海道大学）、植穂奈美（北海道大学）、木原なな（北海道大学）、高本真依子（北海道大学）、保高徹生（産業総合研究機構）、大沼進（北海道大学）

C6-4 阪神大震災；被災者の視点から

○水田和生（NPOJapan Future Research Center）